

・荒井塾長あいさつ

【戦争と鉄道 岸田総理はウクライナを訪問できるか】

ロシアによるウクライナ侵略は1年を過ぎても終わりが見えず、益々激しくなっている。
そのさなかにバイデン大統領が正に電撃的といえるウクライナへ行き、ゼレンスキー大統領と会談し、総額620億円の支援を発表し、ロシアへ大きなプレッシャーをかけた。



私が驚いたのはその移動手段に鉄道が使われたことだ。しかも10時間も列車に乗ってポーランドからウクライナへ入ったことが分かった事である。ウクライナからポーランドへの帰りも長時間列車に乗られた。

報道によると、バイデン大統領がワシントン郊外のアンドルーズ空軍基地を出発したのは2月19日の夜明け前だった。ドイツ西部の米空軍基地を経由し、ポーランド南東部の空港に19日20時に到着。大統領を乗せた車列はサイレンを鳴らすことなく、ウクライナ国境に近いプシェミシル駅に向かい、大統領は8両編成の列車に乗り換えた。列車は約10時間かけて現地時間午前8時頃キーウに到着した。

ゼレンスキー大統領との会談など約5時間の日程をこなし、20日午後1時過ぎに列車でキーウを出発。午後9時前にポーランドの国境に町に着いたという。
バイデン大統領は戦争の当事者ではないが、若しも情報が漏れれば、列車転覆の危険が大きかったと思う。全てが秘密裏に実施された。大統領専用機も使われなかった。

戦争で鉄道が大きな役割を果たしてきたことは日本でも評価されている。
戦後の混乱期に鉄道は大活躍した。昭和20年8月15日敗戦のその日も汽車も貨車も動いていた。それは鉄道職員の仕事へ熱い使命感があったからだ。

一方で、鉄道が戦争の発端になった。
例えば、関東軍の参謀・板垣征四郎、中佐の石原莞爾が画策して、昭和3年6月4日張作霖が乗った列車を爆殺した事件や、満州事変の発端になった昭和6年9月18日の柳条湖事件、日中戦争に発展した昭和12年7月7日の盧溝橋事件などには鉄道が絡んでいる。

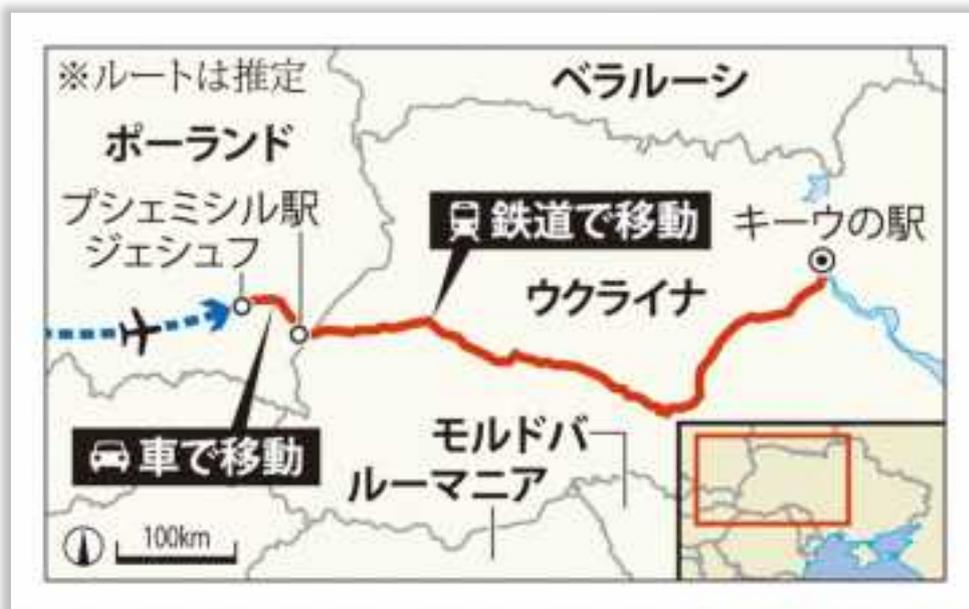
タイからビルマへ抜ける鉄道建設には英米の捕虜が過酷な鉄道建設にかり出された悲劇も語られている。

Kwai 川の SL と鉄橋



岸田総理はいつウクライナへ行くのでしょうか。ゼレンスキー大統領から招待状が来ているそうですが、G7 の首脳は、岸田総理以外は全員がゼレンスキー大統領を訪問している。果たして岸田総理は広島での G7 サミット前にウクライナへ行けるだろうか。日本は岸田さんの身の安全を確保できる態勢があるのだろうか。

問題は激しい戦闘が続く現地での安全確保だ。自衛隊は海外で要人を警護できるという規定がないそうだ。移動手段や日程の秘密保持が求められる。行き先を伝えずに、首相が海外へ出張出来るのか。開会中の国会は野党も与党も黙って首相のウクライナ訪問を認めて、国会へは「事後報告」にしないと安全は確保できないだろう。



完



笑楽日塾2月 Zoomオンライン塾会報告

今月も清藤隆さんの講座「和楽備神社と塚越稲荷神社の話」の紹介と歴史のお話がありましたのでご報告致します。

**和楽備神社と
塚越稲荷神社の話**

令和5年2月9日 笑楽日塾オンライン例会
笑楽日塾 塾生 清藤 幸

「蕨八幡社」(和楽備神社)の由緒

関東管領を拝命し、京都から下向した徳川家9代・徳川義綱の築城した「蕨城(1488)」の守護神として該氏の守り神「八幡大神」を勧請し、「蕨八幡社」として祀られた。

その後、蕨城は城主11代・徳川義基は、三丹山合戦で討ち死(1567) 蕨城となり、「蕨八幡社」も祀られていった。

徳川家康公の江戸移府(1600)となり、慶長17年(1612)に「中山道蕨宿」が開墾されると、鎮守の社となった。

神社合祀政策の波

明治44年(1911)時の町長、岡田健次郎氏は国家政策に沿って、近隣の神社の合祭に奔走し纏め上げた。

明治22年には塚越村も併町となっていたので、塚越三城守の稲荷社の仁中伊稲荷社と下橋稲荷社は合祭になったが、大荒田稲荷社は頑なに反対し、塚越村の村社「塚越稲荷神社」として独立継承した。

まとめ役の岡田町長の分業は大変なもので、各神社ご祭神の違いや、氏子などの意見を尊重し、ようやく「蕨八幡社」に18社を合祭できることとなった。

和楽備神社の誕生と境内の整備

岡田町長は各神社の御代、氏子と巽「八幡社」の御代たちに因り草案を作成し、大正天皇の侍講・本居豊隆博士のご意見を伺い、万葉仮名の「和楽備神社」と命名された。

「和楽備神社」の境内設計は、日比谷公園や明治神宮、埼玉の幸山公園などを手掛けている「公園の父」と誉えられる、本多清六博士が関わって作られている。

塚越稲荷神社のご由緒

塚越稲荷神社の由緒の経緯です。

御祭神 菅原理彦(ミケノミヤノマサノリノミヤ)

ご由緒
往昔、郡國の昔、古俗の様に神主を執務し、理彦に稲部大神の社を創設したと伝えられる。江戸末期に定り、社額を再建し、境内に「稲神社」を建立した。明治6年村社に列し、明治四十四年には、天神社稲荷神社を合併し、昭和二十九年郡会法人となり、奉賛会役員協力して境内を整備し、昭和四十五年には、原田久作、原田隆高時代の協力により、神社益々隆盛し、神社種神格賞の基準符合を達成した。

塚越の地名由来と「塚越稲荷神社」

創建の年代は不明ですが、室町時代の明徳年間(1402~1501)の創建と伝わる。

鎮座する丘は、伊豆国那賀郡の「志快」という鎮国の名門(修行僧)が、京都伏見稲荷大社に参詣の折、お告げを受けて、当地に本願一万余を勧請し、礎石を築いたと伝えられ、この塚が稲越の地名の由来となったという説もあります。(塚越稲荷神社より)

**全国の絶景神社342社
に選ばれた「塚越稲荷神社」**

七夕の「棚まつり」で境内が賑々しく賑わった「塚越稲荷神社」と「稲神社」

学芸出版の「本格的でガイドブック」に、稲越の「いと世し石」、金蓮上其の「白根石」など併せて掲載され、全国区になりました。

塚越稲荷神社が県の観光にも寄与すること大々々期待されます！

清藤さんよりの「まとめ」のお話

「和楽備神社」と「塚越稲荷神社」を調べてみますと、明治44年の「神社合祀令」の通達に則り、時の「岡田町長」の纏め役の心労や、塚越稲荷神社が頑なに合祭反対した経緯など、蕨地区のみならず武州一帯の一大産業に創り上げた高橋家のプライドなども私見として感じられ、蕨市の歴史について学ぶことが大でありました。

いつも斜めから見ることなのですが、進取の気概に富んだ「高橋新五郎家」の伝統は織物業を普及させ関係農家を富ませ。また、鎌倉・京都時代から渋川公の流れを汲むと私見する「岡田家」の連綿と続く伝統は蕨と塚越を結び「蕨町」を成立させ、大正天皇の侍講はじめ、数々の著名人と繋がり、「蕨市」を歴史と文化の薫り高い街に創り上げたことは感謝の念の湧くことに尽きるのです。

ご清聴ありがとうございました。



「シニアの風」

(順番制で行います。2023年3月「シニアの風」投稿は 南 英倫さんです)

たまにのんびりぶらりと一人飲み

塾生:高木輝雄(アバター:ミヤウチテルオ)

1月の仕事も概ね終了。珍しくノンストレスな月末です。蕨駅から京浜東北線東京方面の先頭車両に乗りました。

行く先は4駅先の東十条です。

改札までの上り階段は数年前までは二、三段を一気に駆け上ることができたのですが、最近は一歩一歩転ばないようにのんびりと。



改札を出て駅舎を右に曲がれば、富士神社、十条篠原演芸場、十条銀座ですが、今日は左に曲がり、

だらだら坂を下っていきます。まずは名物のどら焼き屋、土産に数個購入。いつもは何人かの方が待っているのですが、寒さもあり比較的少なめの待ち人数でした。

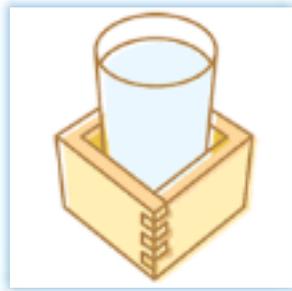
目的地はこの先の「モツ焼き屋さん」、コロナ禍でだいぶご無沙汰をしておりました。時刻はまだ四時前だというのに、かなりの数の呑兵衛さんが楽しんでいます。運良くお気に入りのカウンターの一番左の角が開いていました。隣の方の迷惑にならないようにそっと椅子に腰掛け、お店の方の声がけより前に「瓶ビール大瓶一本」を注文します。



混んでくるとなかなか注文のタイミングが難しいこの店、間髪をいれず、煮込み、スタミナ漬けを頼みました。これは豚の胃袋(ガツ)を細かく刻み野菜と秘伝のタレに漬け込んだものでお店の名物です。大好きな酒のお友達。



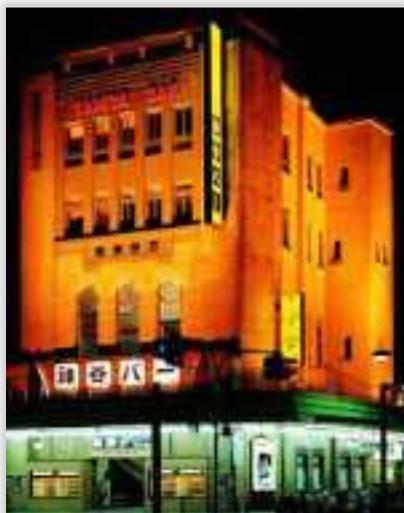
ビールはコップに半分程度注いでグイッと飲むのが大好きです。この時に突き出しで出してもらった大根、きゅうりの漬物も一緒にいただきます。焼き方の状況を見ながらタイミングを計り、焼き物を軽く注文、最初はモツ焼きを塩で頂きます。かしら、軟骨、タン、それから「しいたけの石づき」の部分が大好物でこれはちょっとお醤油をかけてもらいます。



そろそろビールもなくなってきましたので次は何を飲もうかな、この寒さだとハイボールよりはお酒がいいでしょう。やかんでお爛がつけられた「越の誉」を厚めのコップでお願いしました。なみなみと注がれて出るのでこちらからお迎えに行きますが、この時は「ひょっとこ」みたいな顔してるんでしょうね。

さてぼちぼちもつのタレ焼きを頼もうか、レバーと白モツ、軟骨もタレでもう一度、頼みます。レバー、白モツあまり食べ過ぎると六角精二さんじゃないけれど尿酸値が上がるのでやや控えめにしました。

この手の店はあまり長居は禁物、これでもほぼ入店から一時間過ぎました。そろそろお勘定です。コロナ禍でこんなことをしていたらお取引先様にご迷惑をかける羽目になるので実は今回はアバターのミヤウチテルオ君が VR でお店に伺い、飲んだつもり食べたつもりを実況中継してみました。



次回は浅草の奥浅草の釜飯か、神谷バーで串カツとビール、並木のそばもいかなと考えています。

ですが、リアルに一人酒もいいかも知れません。

その時はお世話になっている日暮里のお蕎麦屋さんか町中華屋さんが伺いたいお店です。

最後にこの原稿は GoogleWorkspace のクラウド上のアプリ、ドキュメントの音声入力で作成してみました。当然修正すべき文字変換はあるのですが全て含めて約一時間の作業でした。



完

2023年2月、ロシアがウクライナに侵略を始めてから1月24日で1年がたち、ロシアの無差別攻撃は続き、市民を巻き込む多数の死者が出ている。停戦の「出口」はいまだみえない。

そして中国は信号傍受目的の偵察気球を飛ばし、中国は「気象研究用」と言っているが、どう見てもおかしい。日本も当然、ルート上に入っており、アメリカに流れ(誘導)しているようだ。

嫌な世の中になったものだ。それでは世俗を一旦忘れ、十牛図に入りましょう。



さて、十牛図も6段階に入りました。

今回は1月号の続きで今、作成中の「十牛図」の第6段階・騎牛帰家(きぎゅうきか)の挿絵(水墨画)と第5段階・牧牛(ぼくぎゅう)からの続きをお話したいと思います。

第6段階 騎牛帰家(きぎゅうきか):牛に乗って家に帰る。

前回までのおさらいです。

第1図「尋牛(じんぎゅう)」では、「自分の幸せや目標とは何か」を考えはじめ、探求の旅に出ました。

第2図「見跡(けんせき)」では、その手がかりを見つけました。

第3図「見牛(けんぎゅう)」のところで、その目標がはっきりと姿を現しました。

第4図「得牛(とくぎゅう)」目標に向けて行動を起こし始めました。

第5図「牧牛(ぼくぎゅう)」悟りを自分のものにするための修行で手掛かりをつかみました。

今回は第6図「騎牛帰家(きぎゅうきか)」を見ていきます。

「十牛図」も後半に入ります。牛を飼いならした旅人が、その牛に乗って家に帰る「騎牛帰家(きぎゅうきか)」の場面です。旅人は、見つけた牛(目標)を何とかつかまえ、飼いならしていくうちに、牛と自分がぴったりと、ひとつのものになっていることに気づきました。

「十牛図」は、突然、ある人が牛を探して旅に出たところからはじまりました。その旅も今回で終わりです。自分たちの本来いた場所に、戻っていくのです。旅人は、なぜ楽しそうに歌を歌ったり、笛を吹いたりしながら、のんびりと家に帰って行くのでしょうか。「十牛図」の説くところには、旅人も牛も、もともと同じもので、やっとの思いで牛をつかまえ、手なずけても、「元に戻った」にすぎないのです。

それでも旅人が満足しているのは、誰に言われるでもなく、自分から牛を探しはじめたからではないのでしょうか。自分の足で歩きまわって、いろいろ大変な思いをしてきたことは自分だけの財産です。

苦しい経験をして「元に戻った」ことと、「何もしなかった」こととは同じではないのでしょうか。

次回は第7段階 忘牛存人(牛のことを忘れる)をお届けします。

～続く～